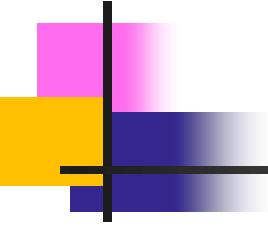


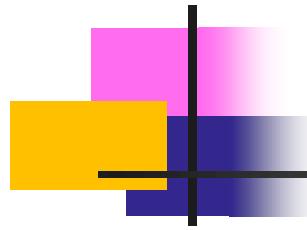
マクロ経済学A

第5回 財市場の総需要



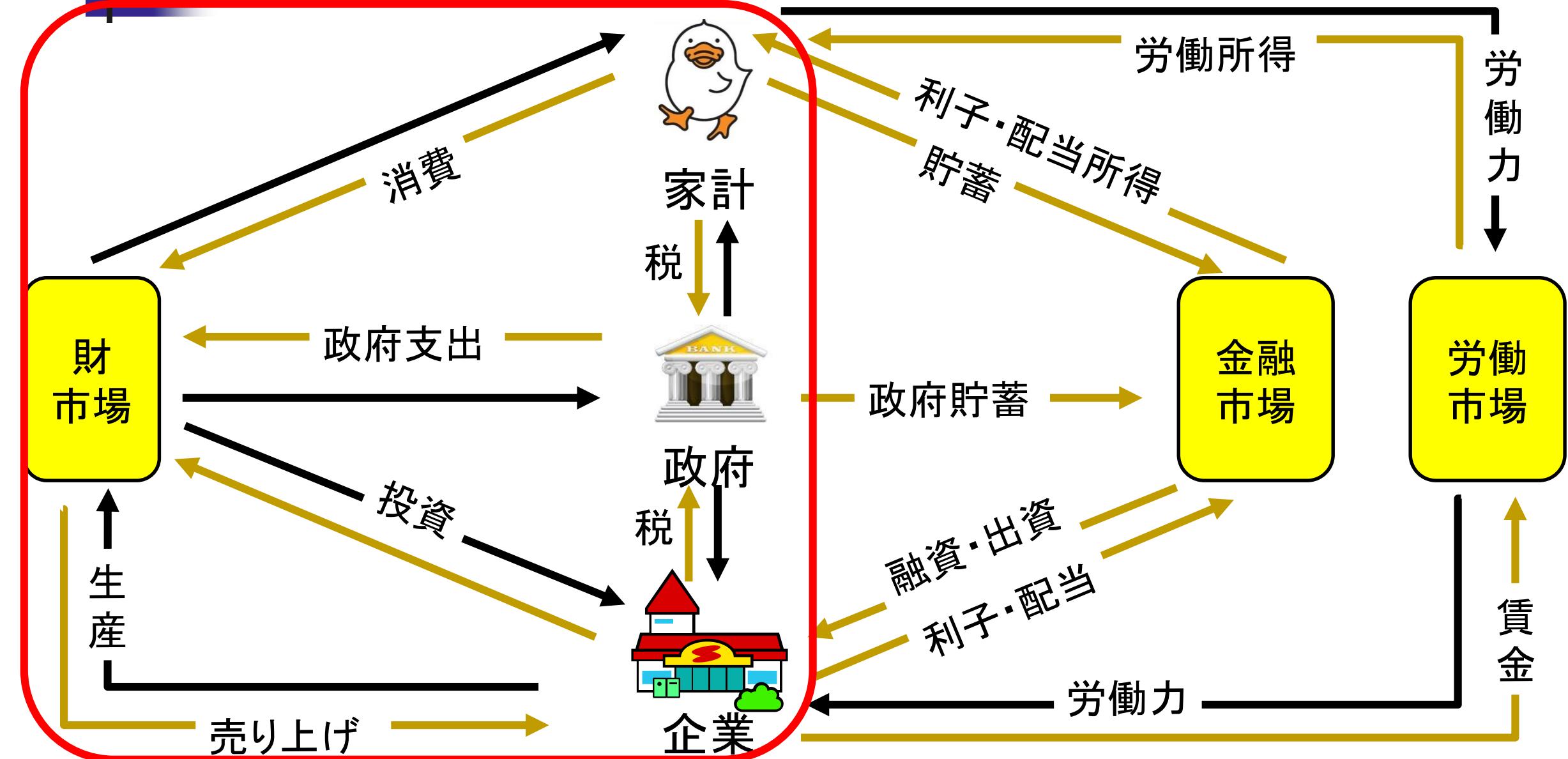
この授業の内容

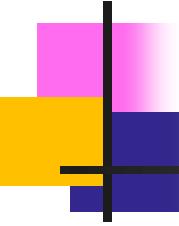
- ① 財市場の需要と供給
- ② 新古典派とケインジアンの考え方
- ③ 財市場の総需要曲線



① 財市場の需要と供給

経済主体と市場の関わり





財市場の需要と供給

財市場における需要

消費, 投資, 政府支出, 海外との貿易

- 需要サイドの政策

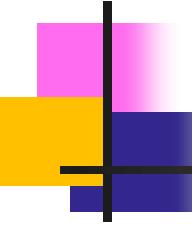
- 財政支出や減税, 金融緩和等

財市場における供給

資本, 労働, 土地, 技術など

- 供給サイドの政策

- 規制緩和や技術革新支援など



GDPの決まり方

供給サイドから見るGDP

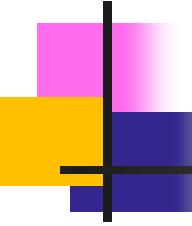
生産がどれほど行われるか

- 資本、労働などの生産要素がどれほどあるか
- 技術水準がどのくらい高いか

需要サイドから見るGDP

消費、投資、政府支出、輸出がどのような動きをするか

- 消費は所得の大きさや雇用に影響を受ける
- 投資は企業の将来の見通しや資金を借りる際の利子率が関係
- 政府支出は政策的に決まってくる
- 輸出は海外の景気動向や為替レートなどが影響



供給サイドから見るGDP

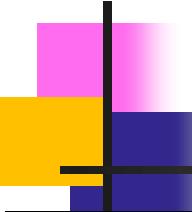
成長方程式

潜在的な成長率を求める式

- ▶ 生産要素の分配率に増加率を掛けたものを足し合わせたもの

例) 生産要素が労働と資本だけの場合

$$\begin{aligned} \text{経済成長率} &= \text{労働分配率} \times \text{労働の増加率} \\ &\quad + \text{資本の分配率} \times \text{資本の増加率} \end{aligned}$$



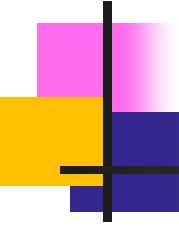
2022年の国民所得（NI）

	金額(10億円)	構成比
国民所得	408,953.8	100.0%
雇用者所得	296,381.8	72.5%
財産所得	30,325.8	7.4%
企業所得	82,246.2	20.1%

例) 労働の増加率が1%、資本の増加率が4%とすると

$$\begin{aligned}\text{経済成長率} &= 0.725 \times 0.01 + (0.074 + 0.201) \times 0.04 \\ &= 0.01825\end{aligned}$$

日本経済の潜在成長率は1.8%



需要サイドから見るGDP

需要サイドの項目

消費，投資，政府支出，純輸出

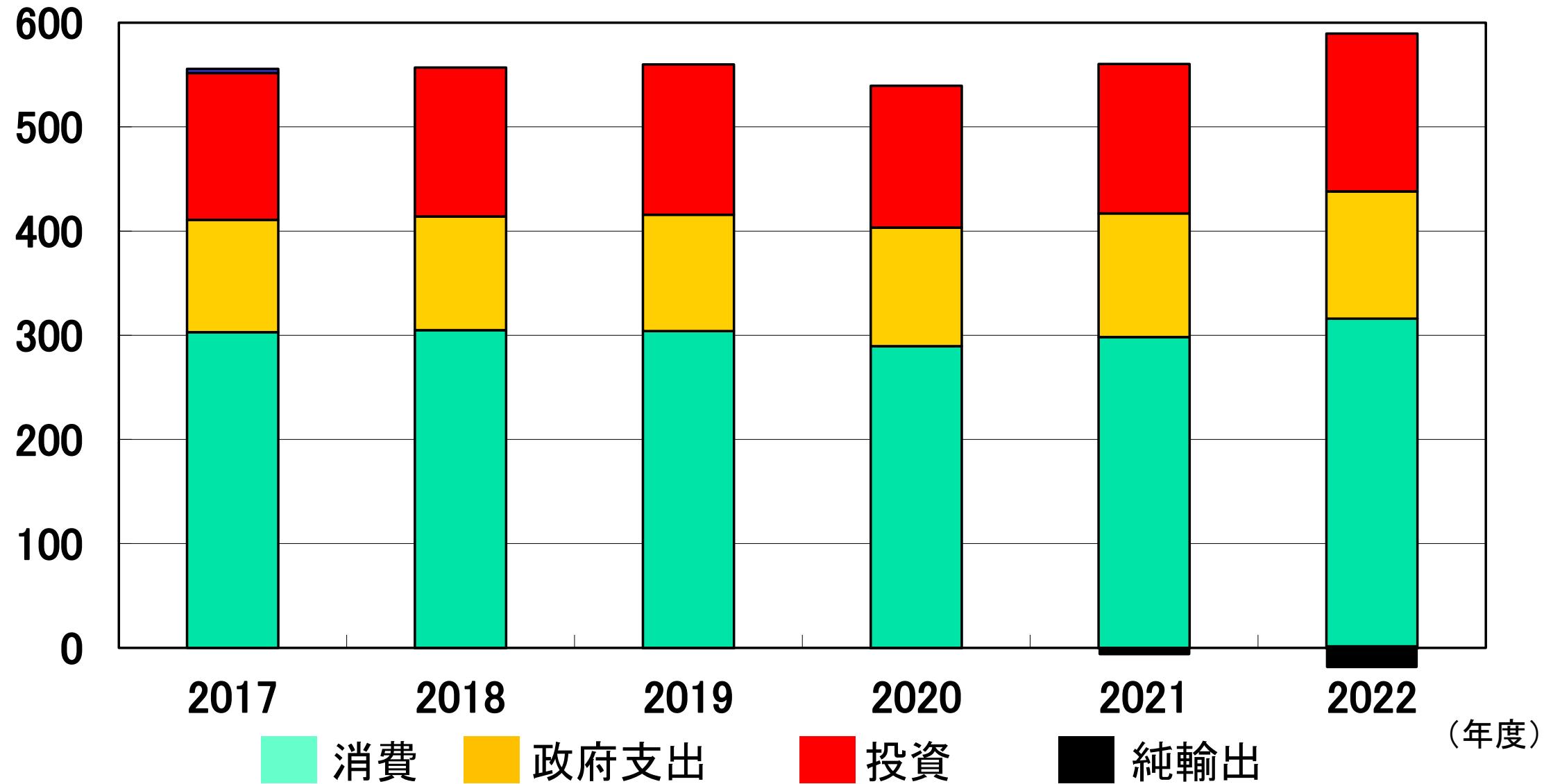
需要サイドからみた経済成長率

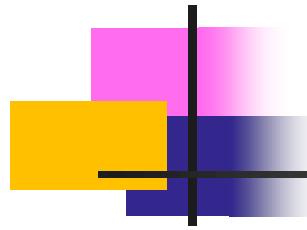
$$\begin{aligned} \text{経済成長率} &= \text{消費シェア} && \times \text{消費の増加率} \\ &+ \text{投資シェア} && \times \text{投資の増加率} \\ &+ \text{政府支出シェア} && \times \text{政府支出の増加率} \\ &+ \text{純輸出シェア} && \times \text{純輸出の増加率} \end{aligned}$$

個々の需要項目のシェアにその増加率を書けたものを、
その項目の経済成長への寄与度という

総需要の構成

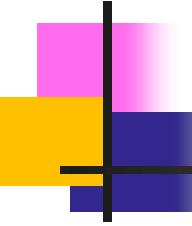
(兆円)





②

新古典派とケインジアンの考え方



どちらがマクロ経済の動きを決めるか

供給サイド

短時間でその状況が大きく変化することが少ない

→ 長期的な動きを見る分野

➤ 新古典派の考え方

需要サイド

短期的に大きく変動したり、一定期間で波打ったりする

→ 短期的な動きを見る分野

➤ ケインズ学派の考え方

新古典派の考え方（イメージ）

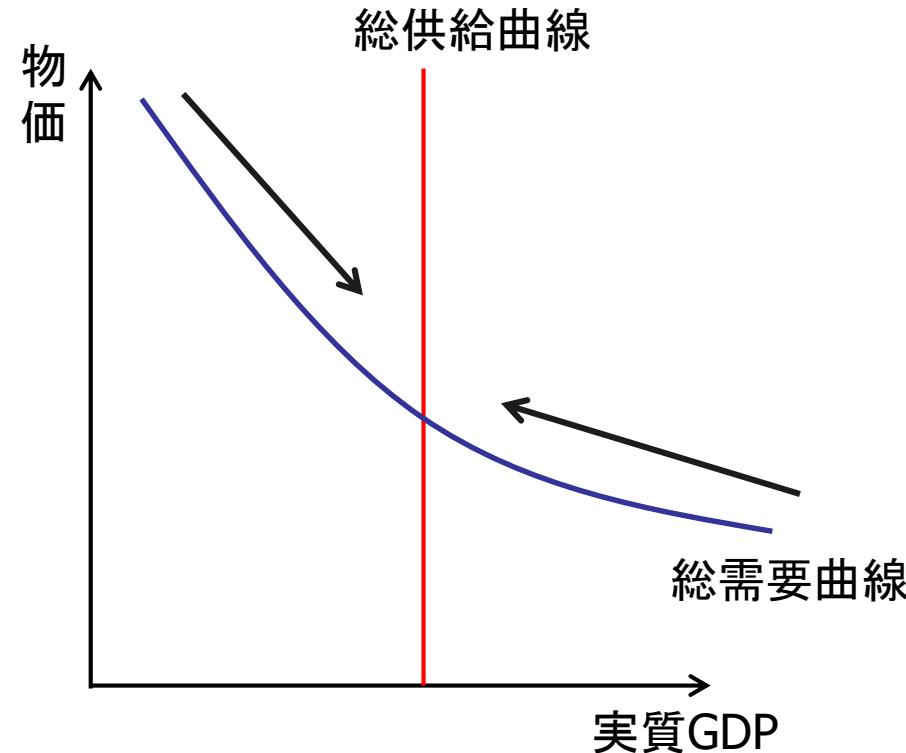
新古典派の考え方

供給が需要を決める

- ▶ 供給は短期的には変化せず、物価とも無関係
- ▶ 需要は物価によって変動

超過供給であれば物価が下落で総需要増

超過需要であれば物価が上昇で総需要減

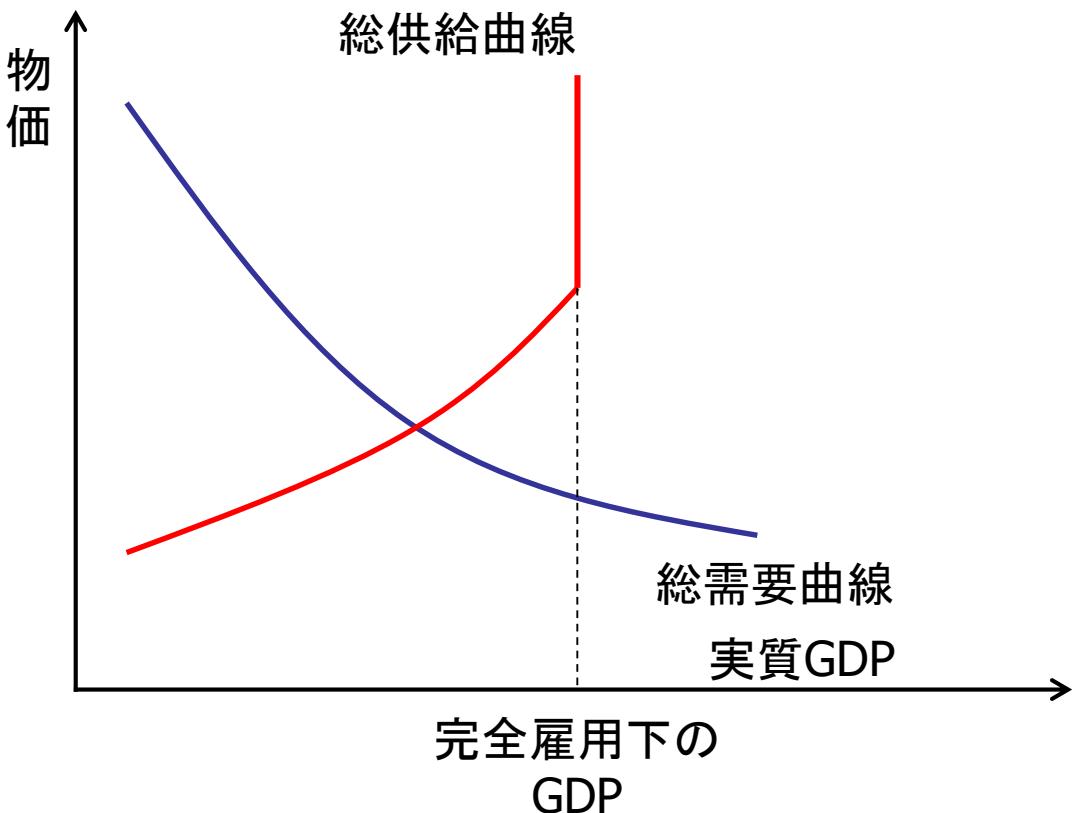


ケインジアン的な世界（イメージ）

ケインジアンの考え方

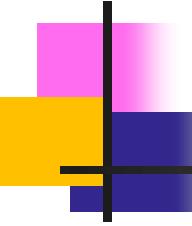
賃金などの調整力が弱いため完全雇用が実現しない

- ▶ 消費や投資が落ち込むと、賃金の調整が弱いため企業の生産が下がる
→ 失業
- したがって 需要を増やすような政策が必要となる





③ 財市場の総需要曲線



財市場の総需要

総需要 (Y_D)

その国で生産された財・サービスに対する需要

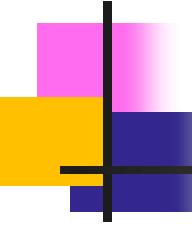
生産された財は需要され、購入（＝支出）される

支出面でのGDP (GDE)

生産された財・サービスを購入する主体は次の4つ

- 家計：消費(C)を行う
- 企業：投資(I)を行う
- 政府：政府支出(G)を行う
- 海外：純輸出(NX)を行う

$$Y_D = C + I + G + NX$$



ケインズ型消費関数

ケインズ型消費関数の基本的な考え方

消費は現在の所得水準に依存して決まる

$$C = C_0 + cY$$

基礎消費 C_0

↳ 所得 (Y) が0であっても、生きていくうえで必要な金額

限界消費性向 c ($0 < c < 1$)

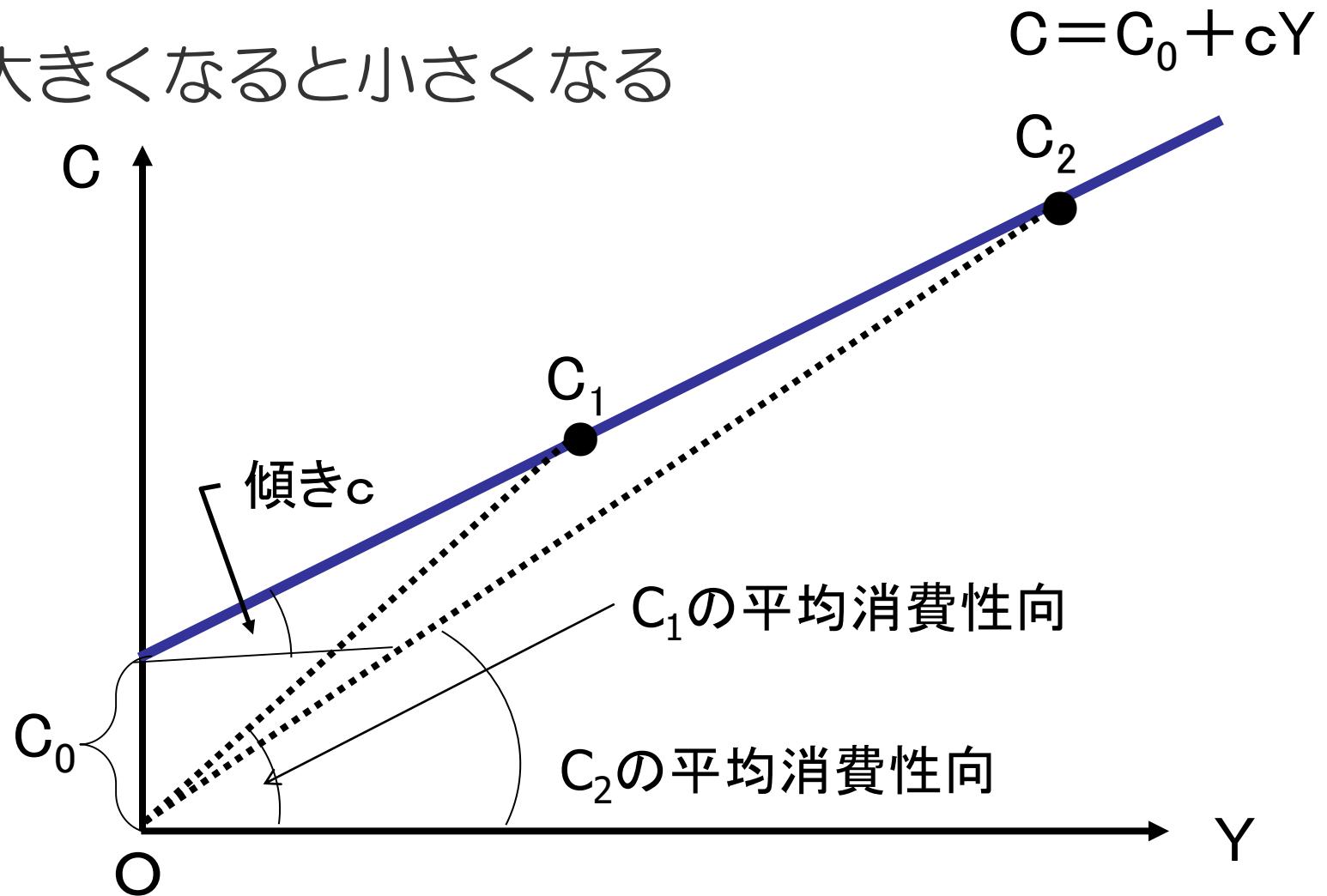
↳ 所得 (Y) が1単位増加した時の、消費の増加分

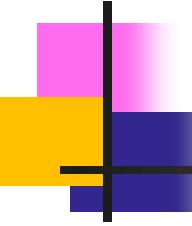
平均消費性向 C/Y

↳ 所得 (Y)あたり平均してどれだけ消費したかを表す

ケインズ型消費関数（図）

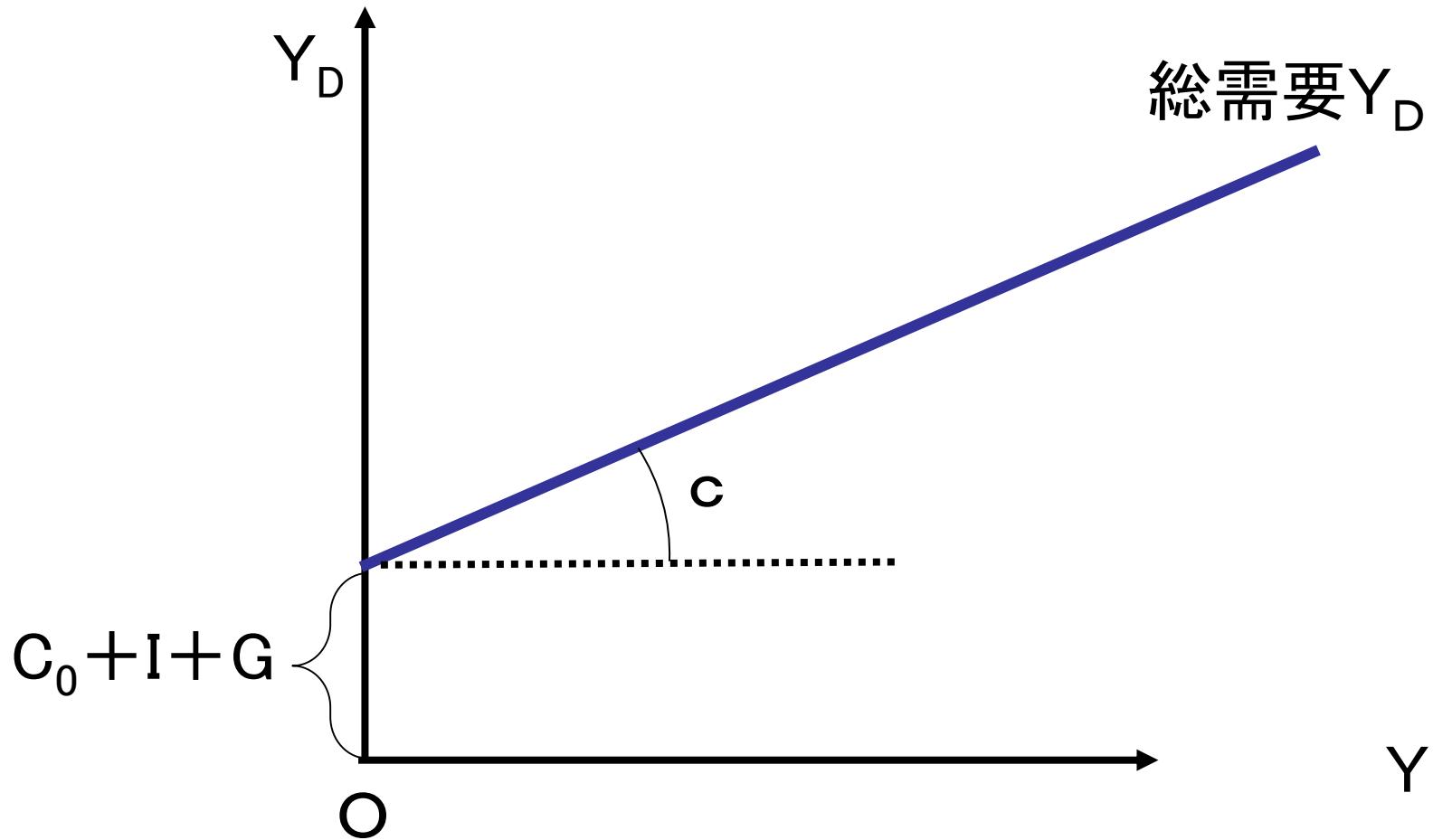
- 限界消費性向は一定
- 平均消費性向は所得が大きくなると小さくなる

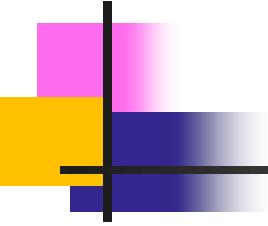




総需要曲線

$$\text{総需要} = C_0 + cY + I + G \quad (NX = 0 \text{ とする})$$





この授業で学んだこと

財市場の需要と供給

経済成長率

新古典派とケインジアンの考え方

短期と長期

財市場の総需要曲線

消費関数、限界消費性向